

三教研総合的な学習部会夏季研修会提案要綱 (③)

願いを実現させようと 自ら考え動き出す子 ～6年生総合的な学習「どうなる？赤い電車」の実践を通して～

蒲郡市立形原小学校 松山 純

1 主題設定の理由

形原小学校のすぐ横を名鉄蒲郡線は走っている。名鉄蒲郡線、通称「赤い電車」は、子どもたちにとって身近で、走っていて当たり前の電車である。しかし、この「赤い電車」は近年、利用者の減少により、多くの赤字を出している。現在、平成27年度までは存続が決まっている状態だが、その先は名鉄と蒲郡・西尾市との協議によって決まっていくといった不透明な状態が続く。

形原小学校には委員会活動はなく、「おたすけ」という活動がある。これを本校では、子どもたちの学校の役に立ちたいという思いや願いを、具体的な活動に結びつけたボランティア活動と位置付けている。子どもたちは昨年度末、次年度の形原小をどんな学校にしたいか話し合う中で、自分たちに何ができるのかを考えることができた。そして、6年になった今、学校をより良くしたいという思いをもって「おたすけ」活動に取り組んでいる。しかし、「おたすけ」活動の実際は多くの支援を受けて成り立っており、子どもたち自身の考えを行動に移していく力はまだ弱い。

「赤い電車」の利用者のおよそ半数は通学での利用である。子どもたちが将来、高校・大学を選ぶ時や進学した時に廃線となれば、高校の選択肢が狭まったり、不便な思いをして通学しなければならないとなったりする。しかし、子どもたちの中には存続問題を聞いたことがある子もいるものの、この問題が自分自身ととても近い問題であるととらえている子はほとんどいない。

この単元の内容は、自分の家族、地域の人、そして自分自身に直接かかわってくるものである。そこで、この「赤い電車」存続問題に目を向けさせ、子どもたちに廃線への危機感をもたせたいと考えた。そして存続問題を見つめていく中で、自分の思いや願いを実現するために、自ら主体となって行動していける子になることを願い、主題を「願いを実現させようと 自ら考え動き出す子」と設定し、研究に取り組んだ。

なお、この実践は途中の段階であり、今後後期も実践を続けていくものである。

2 研究の目標

主題に迫るために、目指す子ども像を次のように考えた。

- ・自分や地域の人がかかわる課題を見つけ、仲間とともに解決の方法を考えていこうとする子
- ・自分たちの願いを実現するために、自ら行動し、実践していける子。

3 研究の方法

(1) 研究の仮説と手だて

《仮説1》自分や地域の人に深くかかわる課題を設定し、気持ち揺さぶられるように単元を仕組めば、子どもたちは問題解決に向けて強い意欲をもち、解決の方法を考えていこうとする。

手だて1-① 地域の人たち、そして自分たちの将来に大きく関わる「赤い電車」存続問題を取り上げる。

手だて1-② 学習を進める中で、存続の理由となることと廃線の理由となることを織り交ぜる。

手だて1-③ 学習したことをまとめて教室に掲示していき、学習の振り返りができるようにする。

手だて1-④ 「市民まるごと赤い電車応援団」の方をゲストティーチャーとして招き、子どもたちに活動の方向性を示してもらう。

《仮説2》赤い電車を存続するための方法を調べ検討していく場や、自分たちの願いや存続のためのアイデアを広げる場を設定すれば、子どもたちは意欲を持続させ、自分たちの願いを実現するために自ら行動し、実践するだろう。

- 手だて2-① インターネット、インタビューなど、存続のためのアイデアを調べ、検討する場を設定する。
- 手だて2-② テレビ・新聞の取材や、名鉄西尾蒲郡線利用促進大会など、自分たちの願いやアイデア、活動の様子を広げる場を設定する。
- 手だて2-③ ゲストティーチャーに、子どもたちの活動について聞いてもらったり、子供たちの成長を認めてもらったりする。

(2) 抽出児

以上の手だてに基づき教科と関連させた単元構想を立てた(8P資料)。仮説や手だてが有効であったか、抽出児A・抽出児Bを中心に子どもたちの変容を追う。

【抽出児A】

何事にもまじめに取り組み、周りの子と協力して活動できる。話し合いでは他の子の考えをしっかりと聞いて、自分の考えに生かすことができるが、自分から積極的に動く姿勢が弱い。存続問題については耳にしていた程度。児童Aにはこの学習を通じて、存続問題がある中でも「赤い電車」を残してほしいとの思いを強くもち、自分から行動に移す姿を期待したい。

【抽出児B】

落ち着きがなく学習に集中できない時があるが、のめりこむととても意欲的に活動し、発言も多い。発想は豊かだが実現する力が弱い。児童Bには、「赤い電車」が存続してほしいという素直な思いを周りの子に広げる姿、思いをもち続け活動に移す姿を期待したい。

4 研究の実際

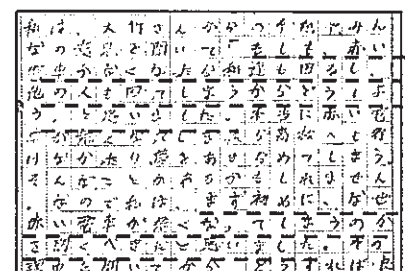
(1) 高校生からの手紙と混雑している赤い電車(手だて1-①)

まず、赤い電車に子どもたちの目を向けさせるために、「赤い電車って言えば?」と投げかけた。すると、「部活の試合で使った。」「蒲郡まつりで使ったよ。」「旅行で乗ったよ。」(児童B)などの発言があった。次に、卒業生で西尾高校の3年生の手紙を紹介した。内容は、①赤い電車がなくなるかもしれないこと、②電車がなくなるから行きたい高校をあきらめた友達の事。③2年後に電車がなくならないようにみんなも使ってほしいこと、などであった。子どもたちからは、「高校生かわいそう。」「夢をあきらめるのはやだな。」「お年寄りや体の不自由な人が困る。」「遠くに行くときに、蒲郡まで車で行かんといかん」(児童B)などの意見が出された。

最後に子どもたちの気持ちを揺さぶるために、通勤通学時の形原駅の写真を提示した。子どもたちからは、「たくさん人がいるじゃん。」「全員乗れるの?」といった感想が出た一方で、「いろんな人が使うのが分かる。」(児童B)のようになくなることを心配する意見も出された。子どもたちは、児童Aのように、いつも走っている赤い電車が、実はなくなってしまうかもしれないといったことを知り、また、人が多く乗っている写真を見て、赤い電車に関心をもち同時に疑問ももった。(資料1)



板書の教室掲示(手だて1-③)

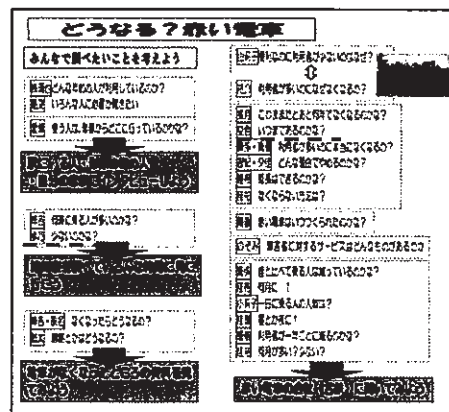


【資料1】児童Aの感想

(2) 調べよう赤電調査開始！(手だて1-②)

ア みんなで調べたいことを考えよう

赤い電車について疑問をもった子どもたちに、調べたいことを出し合う場を設けた。そして、それを調べる方法について意見を交換した。児童Aは「何時に乗る人が少ないのかな。」と、なくなってしまう原因についての意見を出し、児童Bは「いつまでであるのかな。」「名鉄に聞きたい。」と発言した。(資料2)この話し合いで、自分たちでできることと、名鉄に聞きたいことがはっきりしたことで、子どもたちの活動の方向性が見えてきた。



(資料2)板書の教室掲示(手だて1-③)

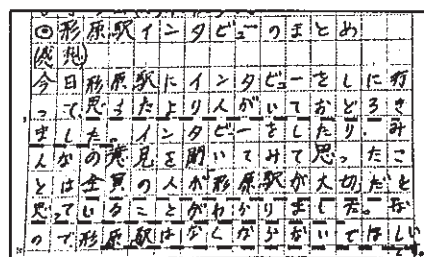
イ 突撃！赤電インタビュー

インタビューは、まず自分の家族や近所の人に聞くことにした。子どもたちは、両親、祖父母、そしてきょうだいなどにインタビューを行った。また、「何時に乗る人が多いのかな」「駅に行って何人乗ってるか調べたい。」(児童B)などの意見から、朝の通勤通学の時間に形原駅に有志で行き、人数を見るとともにアンケートも行うことにした。当日は、6年2組31人中22人も参加があり、子どもたちの赤い電車に対する関心の高さがうかがえた。駅でははじめ、恥ずかしがっている



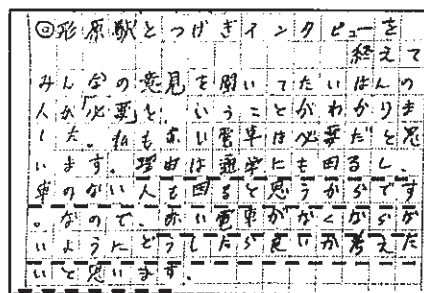
(資料3)インタビューする児童A

子どもたちだったが、だんだんと「もうすぐ電車が来ちゃう！」と、次々に駅にいる人をお願いし、インタビューを進めることができた。(資料3)この時に形原駅にいた人数を聞くと「50人くらいいたよ。」と数えた子が答えた。インタビューをした児童Aの感想からは、思ったよりたくさんの方が利用していることや、利用者の声を多く聞くことで、形原駅(赤い電車)がなくなってほしくないという思いを強くしたことが読み取れる。



(資料4)児童Aの感想

(資料4)次に、インタビューしたことを全体で共有する時間をもった。そこでは、学生や仕事で利用する人が多いことや、昼間はお年寄りが利用していることが見えてきた。また、「通学に困る。」「通勤に困る。」「車に乗れない・タクシーはちょっと高い。」などの声があることがわかった。また、「便利・どこにでも行ける・人の足だから必要。」「通勤・通学・学校行事で必要。」「お年寄り・体の不自由な人に必要。」「バスより安い。」などの声があることが

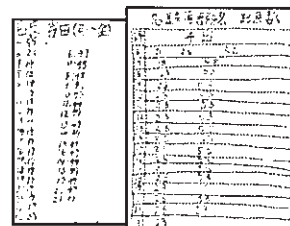


(資料5)児童Aの感想

わかった。そこで、「バスとかタクシーは、代わりになるの？」と投げかけたところ、児童Bが「この前蒲郡から形原までタクシーで2200円かかった。」と言った。子どもたちは「高い！」とつぶやいた。他にも、「おじいさんが、バスと違って電車は時間通り来るからいいって言っていたよ。」と言う子に、「そうそう、俺も聞いた。」とうなずく子もいた。子どもたちはインタビューを通して、赤い電車がなくなるといろんな人がそれぞれの理由で困ってしまうことを実感した。児童Aの感想にも具体的に困る様子の記述があることからそれが分かる。(資料5)また、赤い電車がなくならないために、どうしたらいいのか考え始めた様子が見えてくる。

ウ 突撃！赤電リサーチ

2人の子が「時刻表を調べて来たよ」と言って、手書きの時刻表を持ってきた。(資料6)それ



(資料6)形原駅の時刻表

をもとにして、毎時間実際にどれだけの人が利用しているのか調べることにした。班ごとに行く時間を割り振り、1時間ごとに利用する人数を調べ、あわせてインタビューも行うことにした。

部活の時間や下校後は、参加できる子が調査を行った。翌日、自分たちが実際に見た利用者数を黒板の表に書き込んでいった。(資料7)「完成した表を見た子どもたちの中には計算を始める子がいた。結果を聞くと、「1日で西尾行きでは286人、蒲郡行きでは192人

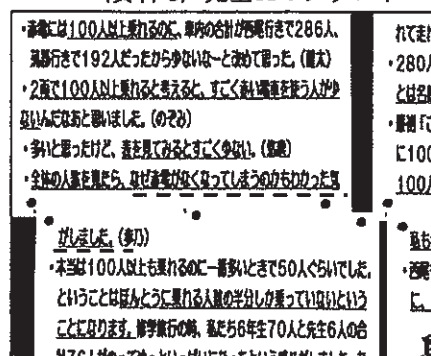


〈資料7〉調べた人数を黒板に書く

乗ってるよ。」と答えた。それを聞いた子どもたちは、「けっこう乗ってるね。」とつぶやいた。そこで、利用状況を実感させるために、「修学旅行で赤い電車に乗った時はどうだった？」と聞くと、「6年全体で69人乗ったよ。」「全員乗っても電車は満員じゃなかったよ」と言う子もいた。さらに、10時台や13時台の車内の人数7人に着目させると、児童Bは「少ない？」と言い、「名鉄、やってられないんじゃない？」と発言する子もいた。(資料8)翌日、教師が先日、部活の練習試合のための回数券を購入するために名鉄蒲郡駅に行った折、駅員さんに聞いた話を紹介した。「一両200人、お客さんの多い蒲郡まつりの時は250人ぐらい乗れるって言ってたよ。」と言うと、「えー、全然乗ってない。」などのつぶやきが漏れた。感想に、「いつもは電車の中にもっとすき間があるんだな」「人が少ない、だからその分赤字になる。」「なぜなくなってしまったのかもわかった気がした。」(児童A)など、廃線もしようがないと書く子が何人もいた。(資料9)

形原駅で赤電を利用する人数を調べよう					
	7時台	9時台	10時台	10時台	11時台
西尾行き	乗 20人	乗 4人	乗 0人	乗 1人	乗 0人
	降 7人	降 2人	降 3人	降 1人	降 0人
蒲郡行き	乗 30人	乗 7人	乗 9人	乗 1人	乗 0人
	降 30人	降 30人	降 30人	降 30人	降 30人

〈資料8〉児童Aのプリント



〈資料9〉教室掲示(1-③)

エ もし、廃線になったら

電車がなくなったらどうなるのかという疑問については、教師の方から10年程前に廃線になった名鉄三河線の運行していた時と廃線後の写真を資料として提示した。二つの写真を見比べた子どもたちは、「形原駅に似てる。」「ここもワンマンかな?」と自分たちの形原駅と重ね合わせるようにつぶやいた。また、「なんだかさみしい。」と言う声があがり、他の子がうなずく姿も見ることができた。

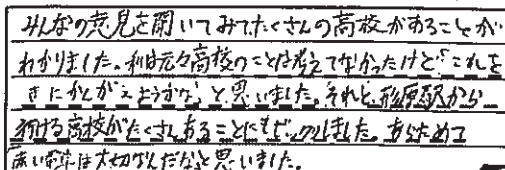
オ 赤い電車で行ける高校調べ

次に、赤い電車を通える高校について調べていくことにした。子どもたちは家の人やきょうだいに、①高校名、②場所、③どのように行くか、④その高校の特色についてインタビューをした、そして、調べてきたことを発表し合った。



〈資料10〉高校調べ板書(一部)

◎赤電授業日記(わかったこと・考えたこと・感想など)

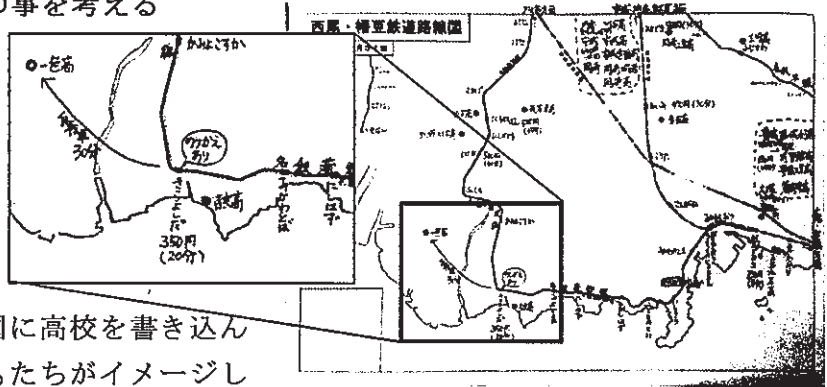


〈資料11〉児童Aの感想

(資料10)調べた高校は18校にもなり、子どもたちは驚きを隠せないようだった。そして、「おれ、近いで三谷水産に行こうかなあ。」「サッカー強い高校はどこかな」など、思い思いに高校について思いを巡らしているようだった。野球が好きな児童Bは「俺は名電に行く。名電って遠いのかなあ。」とつぶやいた。児童Aの感想からは、自分の将来の高校を考えるきっかけとなり、自分たちが高校に行くためには赤い電車が大切だと感じたことが分かる。(資料11)

カ 路線図から廃線になった時の事を考える

赤い電車で通うことのできる高校調べをして将来の事に思いをはせた子どもたちに、次は、廃線になってしまったらどうなるかを考えさせるために、路線図に子どもたちが調べた高校を書き込んだ図を用意した。はじめに、現在の路線図に高校を書き込んだ図を見せた。この図には、子どもたちがイメージしやすいように、形原駅から何分かかり、料金はいくらかを書き

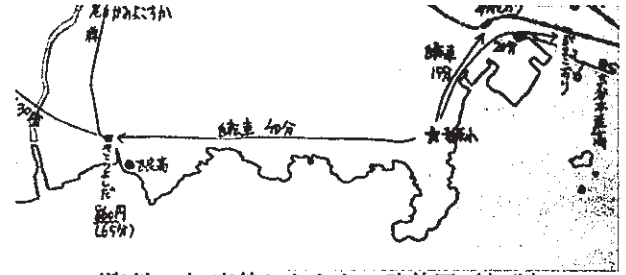


(資料12) 現在の路線図(一部拡大)

込んだ。はじめに、現在の路線図に高校を書き込んだ図を見せた。この図には、子どもたちがイメージし

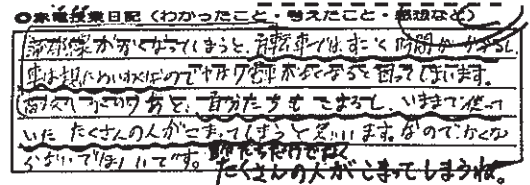
やすいように、形原駅から何分かかり、料金はいくらかを書き

込んだ。(資料12) 図の見方を知らせた後、子どもたちのつぶやきに「一色高校って吉良吉田から自転車で30分もかかるの?」といった疑問が出た。そこで、実は10年前は名鉄三河線が廃線になったことを知らせ、廃線になる前の路線図も見せた。児童Bは「一色高校、かわいそ。」とつぶやいた。最後に、名鉄蒲郡線が廃線になったらどうなるかについての図を提示した。(資料13)



(資料13) 廃線したときの路線図(部分)

子どもたちにしばらく見させておいた。すると「むちゃくちゃかかるよ。」「お金、高い。」などの声が上がった。児童Aの感想からは、自転車で行くことの大変さや親に迷惑をかけたくない気持ち、そして自分たちだけでなく多くの人のためになくならないでほしいという強い気持ちが読み取れる。(資料14)



キ 社会科との関連

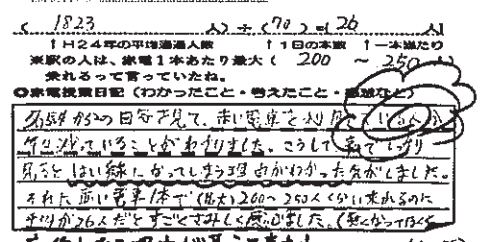
社会科の下の教科書に「私たちの願いを実現する政治」という単元がある。子どもたちは、子育て支援センター「ソーレ」が、市民の願いから始まり議会の承認を経て、2億4千万円の税金を使って建設されていったことを知った。ここで子どもたちは、税金は市民みんなのために使うものであることを学んだ。このことは、名鉄からの回答に含まれる、赤字の一部を税金で補っている赤い電車の現状につなげていく。

平成23年度	平成24年度	前年
356	361	▲
732	723	▲
1,088	1,084	▲
459	456	▲
1,547	1,540	▲
1,840	1,823	▲

(資料15) 平均通過人数

ク 名鉄からの回答から

子どもたちの質問に対して名鉄からの回答が届いた。利用者数の表やグラフの資料なども添えられていた。グラフを見ていくと、「乗る人が毎年何千人も減っている。」と発言した子がいた。しかし、H24年の利用者合計が1,540,000人とわかり、それを365日で割ると、一日につき4,219人となるのを知ると、「けっこう乗ってるじゃん」というつぶやきがあった。そこで、「この人数はざっと乗った人もいれば、一駅だけで降りちゃった人も含まれるよ。」と説明し、平均通過人数1823人(1日)に着目させた。(資料15)「これを、赤い電車の運行本数70本で割れば、一本当たりに乗っている人数の平均が出るよ。」と説明して計算をしていった。すると1本当たり約26人しか乗っていないことが分かった。児童Aの感想には乗っている人の少なさに衝撃を受け、廃線の理由になっていることを感じ取った様子が見えてくる。(資料16)



(資料16) 児童Aの感想

ケ 赤字額を見てもみよう

児童Bは、職員室のとびらの横に掲示してあった新聞記事に、「名鉄西蒲線は2013年度から3年間、西尾、蒲郡両市が年2億5千万円を名鉄に支払う。」という記述があることを発見し、クラスに広めた。そこで、今度は赤字額に着目させることにした。市役所の企画広報課の方に教えてもらったH24年度の赤字額7億3千万円を子どもたちに伝えた。さらに、2億5千万円のうち1億円を蒲郡市が払っていると伝えた。「この1億円って何？」と尋ねると、子どもたちは「税金。」と答えた。そこで、1億円を蒲郡市の納税義務者3万6千人で割ると、一人当たり年に2,778円赤い電車のために税金を払っていることが分かった。子どもたちからは、「毎年ソーレが建っちゃうよ。」「名鉄が5億円ぐらい払ってるじゃん。」という声が上がると、税金を使っていることについて問うと、「赤い電車と関係ないところに住んでいる人まで払うのは変。」という発言もあった。児童Aの感想には、名鉄の負担額の多さに驚き、みんなのために使うべき税金を使うことへの疑問がうかがえる。(資料17)

$$1億円 \div 3万6千 = (約2778) 円$$

◎赤電授業日記 (わかったこと・考えたこと・感想など)

今日の授業で、名鉄の赤字額を知った。お金のことと税金のことからわかった。名鉄から僕らの国を走っていることと、それは、お金の多い蒲郡市、1億2778円がかわかるといい。蒲郡市にだけ税金を払っていい人は、蒲郡市にだけ税金を払っていいから、税金はみんなのために使おう。

(資料17) 児童Aの感想

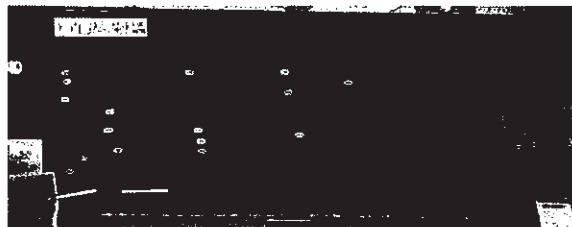
コ 存続させるべきか、廃線してもしょうがないか (話し合い)

これまでの学習を振り返り、「赤い電車を存続させるべきか」「廃線してもしょうがないか」についての話し合いを行うことにした。子どもたちは自分の考えをまとめるために、教室に掲示した学習のあしあとを真剣な目で見ていた。(資料18) 立場を確認すると、存続派が6人(含む児童B)に対し廃線派が25人もいた。話し合いでは存続派は赤帽、廃線派は白帽をかぶり、立場をわかりやすくした。存続派の子の「なくなると困る人がいる」「私たちの未来のために必要」「PRをしていけば」といった意見に対し、廃線派の子が



(資料18) 教室掲示を見る
(手だて1-③)

「利用者数が少ない」「赤字額が多い」「関係ない人が税金を払うのはどうか」という点を挙げながら話し合いは進んだ。(資料19) 児童Bは、「乗るように呼びかけをしていけばいい。」と発言し、「誰がやるのか。」という質問に、「自分たちがやる。」とがんばって発言したが、立場



(資料19) 児童Aの感想

を変えようとする子はいなかった。そこで、企画広報課の方にもらった資料を紹介した。赤い電車利用促進のための高校の部活の大会のこと、まると赤い電車応援団が応援歌を作ったことなどを紹介すると、存続させようとする人たちの存在を知った2、3の子が帽子を赤にした。しかし、白帽の子たちの中には、「でも名鉄の5億円が多すぎる。」とつぶやく子もいた。そのためさらに、「名鉄蒲郡線がなくなることは



話し合いの様子

決定しておらず、可能な限り存続できるよう話し合っていく。」という名鉄の回答を紹介すると、「名鉄がそう言ってくれてるなら。」と多くの子が赤帽に変えた。最後に白帽の子に考えを聞くと、「やっぱり税金とか、名鉄の5億円とか考えると赤にはできません。」と言った。最後に全員に「みんなの本音は？」と問うと、「存続してほしい。」と答えた。全員に感想を言わせると、子どもたちは存続のために自分たちが何かやらなければならないという思いを口にした。児童Aの感想には、名鉄の負担を考え、自分たちにできることを見つけていかねばならないという強い思いを読み取ることができる。(資料20)

◎赤電授業日記 (わかったこと・考えたこと・感想など)

今日の話し合いで、前は存続してほしいが廃線はしょうがない。と言ってきたけれど、名鉄の人の回答を見て、考えがかわりました。それで、蒲郡市には税金が税金を名鉄から払って、蒲郡市にだけ税金を払っていいから、蒲郡市にだけ税金を払っていいから、税金はみんなのために使おう。他の人にも伝えてあげるように、自分たちが何か考えて行っています。

(資料20) 児童Aの感想

サ ゲストティーチャーにアドバイスをもらう(手だて1-④)

夏休みを前に、これまでの学習を再確認するために6年生全体で赤い電車についての発表会を行うことにした。そこに、「蒲郡市民まるごと赤い電車応援団」にもかかわりのある形原地区の総代会長さんにゲストティーチャーとして来ていただいた。まず、子どもたちがこれまでの学習の様子を紹介していった。次に、総代さんの話を聞いた。総代さんは、他地区でのイベントについて、存続のための補助金が出る形原地区内巡回バスの計画について、赤い電車がなくなって困った一色高校についての話をしていただいた。最後の質疑応答で児童Bが「赤い電車を存続させるためにいろいろな人に呼びかけていきたいと思いますが、どんな方法がありますか？」と質問した。総代さんは、「これからの学習の中で、ぜひ皆さんの力で調べていってください。」と答え、最後に「私もがんばっています、皆さんも一緒に赤い電車を残すためにがんばりましょう。」と、子どもたちにメッセージを下さった。(資料21) 児童Aの感想には、これから自分たちも赤い電車のためにがんばっていききたいという決意を読み取ることができる。(資料22)



(資料21) 総代さんと質問する児童B

今日、〇〇さんの話をきいてみて、私たちがよくわからなかった「存続のための運動」などを教えて下さり、すごく将来のためになったと思いました。私たちが全く知らなかった活動がたくさんあったのもおどろきました。〇〇さんが「一緒にがんばって下さい」と言ってくれたので、私もこれで終わりではなく、これからも赤い電車のために考えていきたいです。

(資料22) 児童Aの感想

5 まとめと今後の課題

これまであまり関心がなかった赤い電車が、実は家族や地域の人にとっても必要とされていることを子どもたちは見つけてきた。そして、自分の将来に存続問題が深くかかわることに気づいていった。児童Bが毎回多くの発言やつぶやきを残したことは、赤い電車の存在がBにとってとても近くなったことを示している。さらに児童Aの感想からも、廃線の原因となる問題に悩みながらも高い意欲をもって取り組めたことがわかる。このことから、手だて1-①は有効であった。

児童Aの感想を追うとわかるように、存続、廃線、それぞれの理由となる事柄に焦点を当てて単元を進めていくと、子どもたちの気持ちは存続を願う方向、廃線も仕方がないと思う方向に揺れ動き続けた。そして最後には、問題を抱えながらも自分たちの願いを実現させようとする強い意欲を持つことができた。このことから、手だて1-②は有効であった。

板書を、子どもの発言・つぶやき・感想もあわせて教室に掲示していった。子どもたちは授業中に掲示を振り返ったり、放課に見たりしていた。存続か廃線かの話し合いの前には、掲示の前で真剣に考える子どもたちの姿があった。このことから、手だて1-③は有効であった。

ゲストティーチャーの総代さんとは事前の打ち合わせで、①活動について知っていることを全部話さず、今後の学習への余地を与えてほしいこと、②共にがんばっていききたい気持ちを伝えてほしいこと、の2点をお願いした。児童Aの最後の感想からは、自分たちがこれから活動していくことに対し力を与えてもらった様子が分かる。このことから、手だて1-④は有効であった。

単元を進める中で、多くの資料を活用した。しかしそれは子どもたちが見つけてきたものではなく、教師が準備して提示したものが多かった。子どもたち自身が資料を探し、全体に広げる場面が必要だと感じる。また、存続か廃線かの話し合いでは人数の差が大きくなり、活発な議論であったとは言えなかった。資料の提示の仕方や順番を考えていく必要がある。

「私もこれで終わりではなく、これからも赤い電車のために考えていきたいです。」児童Aが最後の感想で書いた言葉である。この実践は、まだ半分まで来たところであり、夏休み後も存続させるための活動を展開していく。子どもたちはまず願いを強く持つことができた。今後は赤い電車を存続させるために、子どもたちが自ら考え行動していけるよう支援を続けていきたい。

単元構想図 (17時間完了)

《単元構想図》 どうなる！赤い電車？～赤い電車の存続をめぐる～ (全17時間)

【ねらい】

- 高校生からの手紙を読むことで、赤い電車について興味を持ち、調べてみたいという思いをもつことができる。
- 町の人や利用者が廃線についてどう感じているか聞き取り調査をすることができる。
- 利用者数を調べたり、名鉄からの回答を見たりすることで、赤い電車の存続が危ぶまれている理由を実感することができる。
- 電車存続のために多額の税金が使われていることを理解することができる。
- 電車が必要か不必要か、根拠を明らかにして考えを持つことができる。
- 天野さんの話を聞き、自分たちで動き出すことの大切さを感じることができる。
- 電車を残すために、どのような活動がされているか調べることができる。
- 赤い電車を存続させるために、自分たちでできる活動のアイデアを調べていくことができる。
- 自分たちの声を利用促進大会や市に届けることで、自分たちの活動を広げていくことができる。
- 活動を続けていく大切さをより多くの人につたえていくことができる。

【学習活動と子どもの反応】

高校生からの手紙と混雑している赤い電車①

- 赤い電車がなくなるらしいよ。
- なくなってしまうと、中学生が言っていたように、将来通学に困ってしまうね。
- でも、朝に赤い電車を見ると、たくさんの人がのっているよ。
- たくさんの人が使っているし、ないと困るのに、なぜなくなってしまうのかな。
- 赤い電車についていろいろ調べてみたいね。

調べよう赤電調査開始 2・3・4・5・6

- 駅のホームや、家の人、近所の人にインタビューしてみよう。
- お兄ちゃんが、電車がなくなると西の方の学校に通えないから、高校を選ぼうとに限定されてしまうと言っていたよ。
- おばあちゃんが、病院に行くときに困ると言っていたよ。
- 電車がなくなっても特に困らないという人もいたよ。
- 電車が来る時間に形原駅のホームを見に行こう。
- 朝夕は多いけど、昼間は乗る人がすくすくないなあ。
- 自分たちがどんな高校を選べるか調べよう。
- 廃線になると、通学にとっても困る高校があるよ。
- 名鉄の会社に質問してみよう。
- 赤字が7億3千万円近くもあるよ。蒲郡市は毎年1億円を払っているんだって。
- 利用者がここ10年で4.3万人減っているね。
- 社会で、税金は多くの人のために使うと習ったよ
- 税金も使って残されているんだから、廃線になっても仕方ないのかなあ。

赤い電車は本当に必要なのかな？ 7・8

〈何とかして残すべき〉

- 自分たちが高校を選べなくなる
- 運転できないお年寄りが困る
- 税金は困った人のために使うもの
- 残すための活動で利用者は増える

〈廃線もしようがない〉

- バスが代わりになる
- なくなっても困らない人が多い
- 税金はもつとほかで使うべき
- 5億円はあまりにも多い
- 利用者は年々減っている

○赤い電車を使ったイベントや、あるんだね

○赤い電車の歌を作って

○本当はみんな残したい気持ちでいっぱい。ではどうすればいいのかな

○残すための活動をしている人の話を聞きたいな。

実際に活動していた人の話を聞こう⑨⑩

- 形原地区の総代会会長の天野さんの話を聞こう。
- 自分たちが話し合ったことを聞いてもらって、天野さんに意見をもらおう。
- 西浦や吉良など、ほかの地区でもイベントが行われたよ。
- 存続のために、駅を中心に形原地区内にバスを走らせる計画があるよ。
- 電車がなくなるとどうなるか。廃線した三河線のようになってほしくない
- 電車の良さをもっと知ってほしい。
- 多くの人に伝えていける方法を考えてみましょう。
- 共に赤い電車存続のためにがんばりましょう。
- 存続のために、自分たちでできることはないか、調べていこう。

赤い電車を残すための活動について調べよう⑪⑫⑬

- インターネット、電話、インタビューなどで調べよう。

蒲高生による YouTube 中学生の練習試合 企業による通勤利用促進
ウオーキングイベント 西尾市の「にしがま応援団」 市役所の受付の応援BOX
蒲郡市「市民まるごと赤い電車応援団」

- いろいろなことをやっているなあ
- 学生や大人、いろんな人がやっているんだね
- いろいろなアイデアを出してやっているね
- 自分たちもやれることを考えていこう。

自分たちでできる赤い電車存続の方法を考えよう⑭⑮⑯

- 自分たちが積極的に利用しよう
- 市民さんに手紙を書こう
- 議会で想いを伝えたいな
- 新聞に投書しよう
- 市役所の意見箱に意見を入れよう
- 遠足や子供会で電車が使えるように、先生や家の人にお話ししよう
- 形小のみんなに電車の大切さを伝えたいな

赤い電車を自分たちの手で存続させよう！

市長さんへの手紙を書こう

市議会に自分たちの活動を紹介してもらおう

学校集会で発表し、後輩たちにも思いをつないでもらおう

西尾の小学校との交流をして赤電仲間を作ろう

市役所の意見箱に、みんなで投書しよう

ラグーナの絵あかり展に赤い電車の絵手紙を出して伝えよう

新聞に投書しよう

名鉄西尾蒲郡利用促進大会で意見発表しよう

○クラスの文集に今までの活動を振り返る文を書こう。

○文集を後輩たちに残し、活動を続けてもらえるようお願いしよう。

○中学になっても、赤い電車を残す活動を続けていこう。

【☆支援 ◎評価】

☆本教材に興味をもたせるために、卒業生からの電車がなくなると困るといった内容の手紙を読む。

◎赤い電車の存続が自分たちの未来と大きくかわっていることに気付くことができたか。

☆困ることを世代別にまとめることで、いろんな人たちが電車を必要としていることを実感させる。

☆利用者が少ないことを実感できるように、実際に形原駅を見に行く。

☆路線図に高校の場所を当てはめることで、通学に困ることを実感させる。

☆利用者、赤字額の変化を読み取りやすいように、表やグラフにした視覚に訴える資料を提示する。

◎なぜ存続の危機に陥っているのか、調べ学習や名鉄の回答から理解することができたか。

☆自分の考えを述べさせる際は、根拠をもとに話ができるようにする。

◎話し合いを通じて、存続の難しさを感じ、それでも残したいという思いをもつことができたか。

☆天野さんの話を聞く前に自分たちで話し合ったことを聞いてもらい、今後の活動の参考になるようアドバイスをもらえるようにする。

◎話を聞くことで、赤い電車を残すために自分たちが動き出すことの大切さに気付くことができたか。

☆調べたことを共有するために、お互いに調べたことを発表し合う場を設ける。

◎多くの人が、電車を残そうと努力していることに気付いたか。

◎自分たちにもできる活動のアイデアを見つけることができたか。

☆一つ一つのアイデアをそれぞれで実行するだけでなく、学年全体で取り組んでいくことで、自分たちの思いがより広がるようにする。

☆利用促進大会で意見発表の機会をもらったり、自分たちの声を直接市に届ける場を設けたりすることで、赤い電車を残すための活動を広げていけるという実感をもたせる。

◎自分たちの願いを届けることの大切さを感じることができたか。

◎今後も活動を続けていく大切さを感じ、それを多くの人に伝えようとすることができたか。

私たちの願いを実現する政治＜社会＞

- ・自分たちの願って実現させる方法があるんだね。
- ・税金は多くの人のために使われるといいんだね。

瀬戸の明日のために＜道徳＞

- ・何度も失敗しながら、瀬戸物をよくしようと頑張ったなんて、すごいな。
- ・故障のために努力をしてくれてすごい、わたしたちが形原のためにできることってなんだろう？

赤い電車のポスターを書こう＜国語＞

- ・伝えたいメッセージを考えよう。
- ・多くの人に見てもらえるポスターにしよう。

問題を解決するために話し合おう＜国語＞

- ・友達の見解も参考に話し合おうと、新しい考えが浮かんでくるね。

絵手紙を書こう＜国語＞

- ・ラグーナの絵あかり展で赤い電車の事をPRしよう。
- ・他の学校にも呼び掛けて、絵あかり展を赤い電車っていいにしよう。

「わたしの意見」を書こう＜国語＞

- ・インタビューやアンケートで調べてみたい。
- ・自分の考えを分かりやすく伝えるにはどうしたらいいのかな。